

過る七月十三日(水) 毎日新聞

新刊「読者の目」欄(投稿者宮崎  
京都城市郷土史家 西園重徳(七  
十一)氏)の「軍に徴用された馬  
たちは……」の記事は、まったく  
私と同感で、涙読しました。

# 軍馬に徴用された馬たちは…

## 山口にて 白藤 薫

その訳は、当時はきびしい戦いの真只中で、私は軍馬徴用の責任者としての体験があります、時は既に四十数年の昔と過ぎ去った今日において、この記事を述べられた西園氏の、あたたかいお心に接したからです。

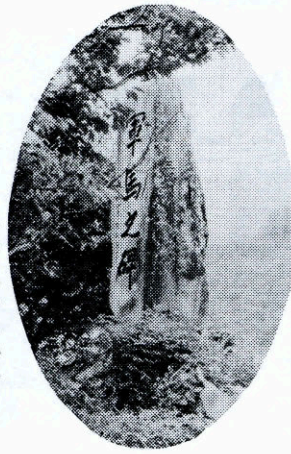
長い戦争で、我が三隅からも数多くの馬が徴用され、まったく愛児と別れるような気持で、農家の皆さんが協力下さったのです。可愛い馬達は、遠いあちらへ渡つては、ある馬は炎熱黄塵のところへ、あるいは極寒の広い野悪路を突進し、又は輻重輸送の重責を、弾丸雨飛のあいだに果すなど、戦いの勝敗は別として、国の存亡興廢に臨んでくれたことは、人間同様であります。

このような考えから、私は軍用保護馬鍛錬会の席上で、物言わぬ勇士の霊を永遠に慰めてやりたい

と、軍馬の碑建設のことを述べ、あくまでも動物愛護の心を後の世まで貫いて、優秀な馬匹の育成を願ったのです。

ところが、幸に郷里から大陸に雄飛して成功された友人が訪ねて来られ、軍馬の碑建設に賛成金一封を下された。

折もよく紀元二千六百年記念として、忠魂碑再建のため、その碑石探しに奔走中、辻並の山で見つけたのが軍馬の碑石です。早速、時の県知事熊谷憲一先生に、雄大に名筆を揮って下さいと石の型紙



軍馬よやすらかに  
宮の馬場軍馬の碑

をお渡ししてお願いしたのです。その後竣工式は、昭和十六年十一月二十四日、場所は氏神八幡宮馬場北側高地を選び、古屋宮司祓式の下、有志者及び軍用保護馬鍛錬会員一同の余列で最も盛大にあげました。

新聞に寄稿された西園さんも、愛馬進軍歌のことに触れておられましたので、私もその歌の作詞者と作曲者のお名前を書いて敬意を表しました。

愛馬進軍歌  
くに出してから幾月ぞ

共に死ぬ気で此の馬と攻めて進んだ山や河  
執った手綱に血が通う

昨日陥したトーチカで  
今日は仮寝のたかいびき  
馬よぐつすり眠れたか  
明日の戦は手強いぞ

弾丸の雨降る濁流を  
お前たよりに乗り切つて  
つとめはたしたあの時は  
泣いて秣を食わしたぞ

慰問袋のお守を  
掛けて戦うこの粟  
毛  
ちりにまみれたひ  
げづらに  
なんで懐か顔よ  
せて

伊達には佩らぬこの剣  
まっさき駆けて突  
込めば  
なんともろいぞ敵の陣  
馬よ嘶け勝関だ

お前の背に日の丸を  
立て、入城この凱歌  
兵に劣らぬ天晴れの  
勲は永く忘れぬぞ

作詞者 香川県仲多度郡琴平町  
現代歌人協会々員  
久保井信夫氏  
作曲者 福岡県門司中学  
音楽担任  
新城 正一氏

伊藤ソズエ  
蝉しぐれしげき朝のひと、きよ  
喘ぐがに炎ゆるひと日の始まり  
夕映えの海のかなたの豪雨禍に  
想いはせつ、空を見ており

久行 行  
テレビにて見たる幼児の微笑に  
吾子のしぐさをふと思ひ出す

平川 育子  
逝きたるは君の生命と思えども  
諦めきれぬ夜半は続きぬ  
夏盛る伊勢路を吾れの恋いくれ  
ば五十鈴清みて神の鎮まる  
うからも友にも気配る手土産  
を発車の際まで購うわれは

磯野 弘子  
白木権活けて涼風吹く縁に茶を  
点て、待つ友の素顔を  
稲妻と雷にわれ戦きて駆け入れ  
ば友さらに驚く

安藤 芳江  
家遠き深山仙道行きをれば青き  
木の実の落ちて鳴るかも  
峠路に安らいをれば近き嶺の青  
葉光りて夏さりにけり

平川 喜敬  
勝浦の嶋の館の湯の洞に天地尽  
きぬ潮鳴りを聞く  
とりよろう生駒青垣過ぎゆけば  
日は照り渡る大和国原

臼井 麻子  
朝まだき庭にひとときわ彩放つ紫  
紺のあさがお咲き極まりつ

立間 雅子  
さわさわと吹きゆく風に稲穂ゆ  
れ過ぎゆく季の田の広々し

岡林 鎮雄  
鈴虫のいずこにかいて鳴きいる  
をしまい湯にいてわれは聴きを  
り

吉村 恵子  
あめつちの恵みをうけてとこし  
えに命はぐくむ一粒の種  
病める身をむしろにゆだね子が  
好きと葉枯れしラッキョウさぐ  
りほる姑

岡 松子  
茅の葉にとまる蜻蛉の翅光る盃  
蘭盆過ぎて日ざし澄みきぬ  
めりはりのきく亡母恋し軒下に  
吊す小紋の折り目すがしも

石村 栄助  
朝の海に航跡幾すじ残しつ、出  
航はやがて鳥影に消ゆ  
こぼれ餌をあさる鴉の一群れ  
は入りゆく船のあとを追うなり

嶋田 靖代  
虫の音に誘われ窓辺に佇めば月  
影もはや秋の色なり  
お手玉の手つき拙き吾子なれば  
我も伝えん母の如くに

お手玉の手つき拙き吾子なれば  
我も伝えん母の如くに